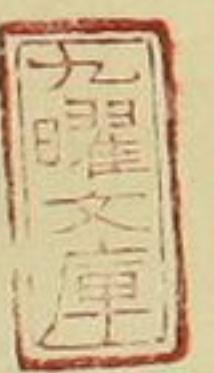
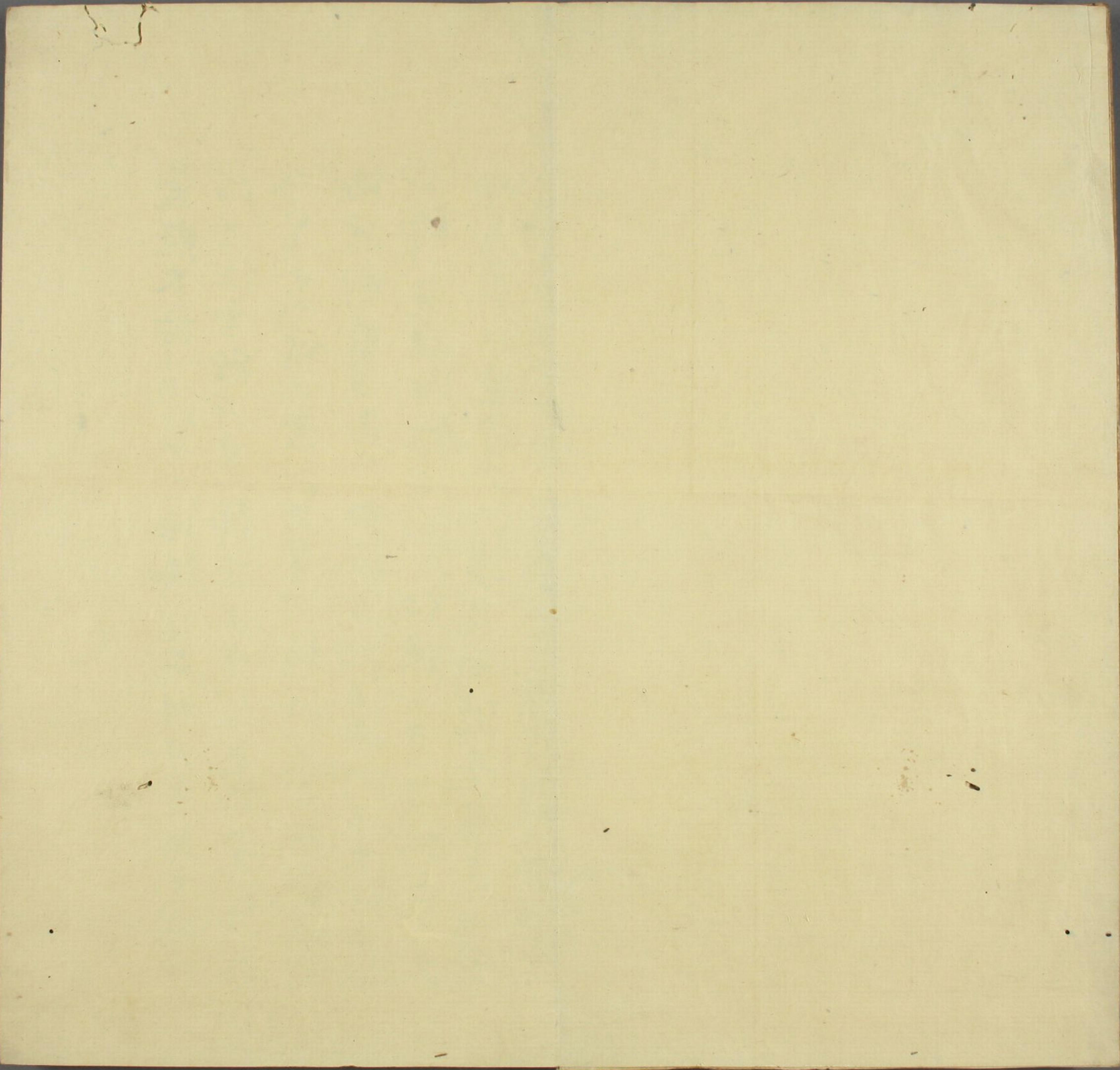


10
9
8
7
6
5
4
3
2
1
0

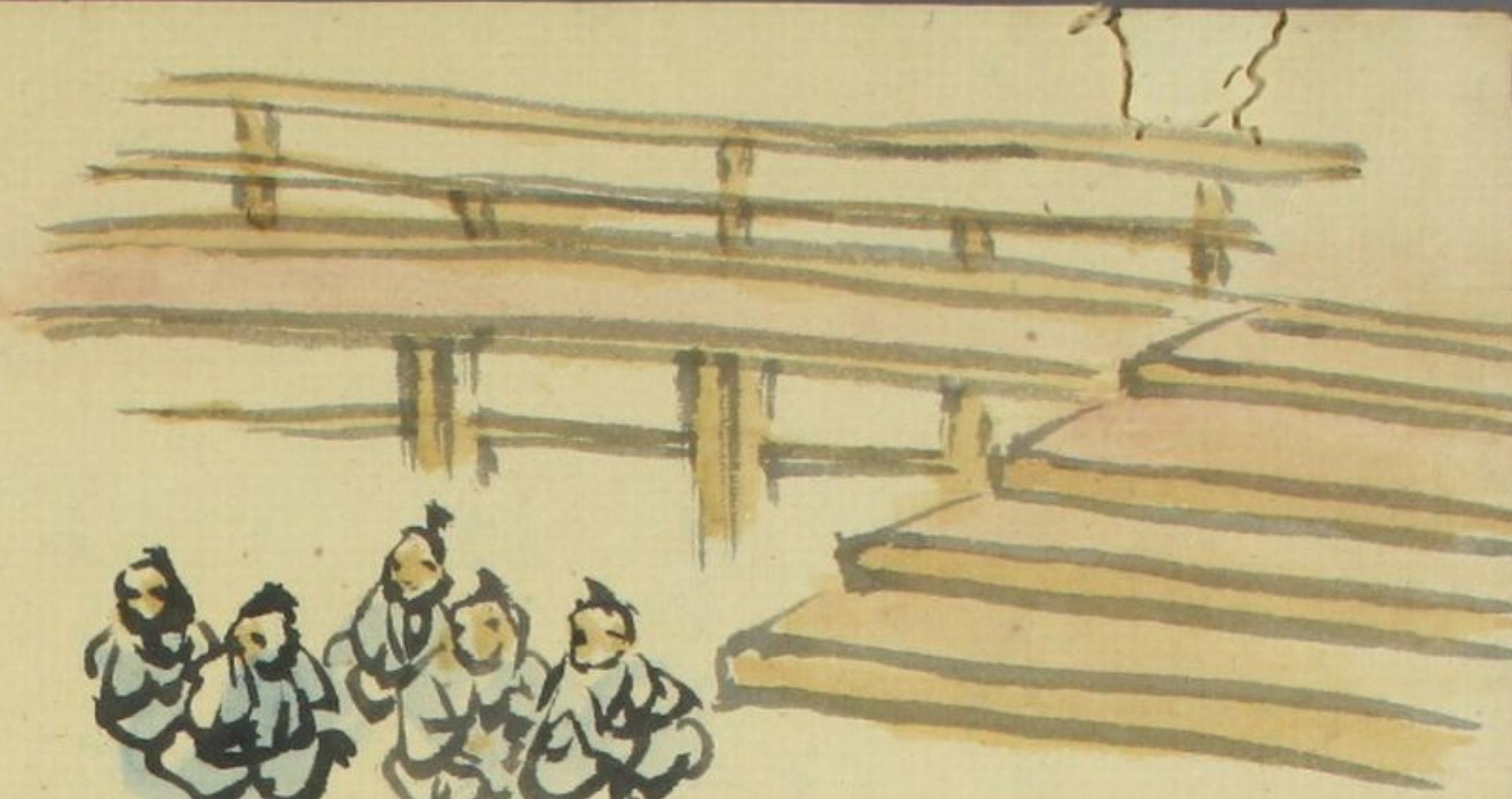




卷之三

天照大神乃第二画御兒天穗日命出雲國年
降至住勢給布其御末出雲國巨野見宿称
人皇十一代 無仁天皇乃御時大和國經向珠
城迺朝庭止重埴濟能功日興利且本姓造陵
土師迺姓乎賜布 仁德天白王乃御宇土
師能臣乎連登賜布其後阿波守宇庭多男
達江介古人 芳仁天皇天應年中土師多
姓乎宦不全改底名了彌乎賜布又延曆年中
朝臣呼賜此嫡男從三位清公卿御子委誠
從三位嘉祥由長官若原多是善卿其御子
宦至相生在麻源今爾至御家迺綿

野人宿
暖色
火



野見宿
塙
人馬
稚
牛



仁皇五十四代仁明天皇崇和十一年乙丑美月仲連生諱父
季誠之位也。あはまの御内侍御子伴氏をも道食弓
小名阿峰是と申す。尊号徳宣と名乗る。御一字を
こととしした。御印叶う。して東大助知
わきく。御一氣まで。御えりりと。おもむと。以て
筆舌の如きは。又、弟りく。文章以
尼寺に詣で。花多風月の名を。自ら考
考す。所を。と。され。る。が。末代。ひそかに。いそ
高志と。ちと。そ。な。は。は。ま。ま。じ。と。と。と。
ヨリ。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
御。は。く。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
れ。ひ。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
江えつ。と。太。字。と。ま。せ。の。ひ。る。と。と。と。と。
の。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。

菅公御生誕



若公
立年の清叶
談天門
大字空
餘上



至公十一年夏五月於比叡山之法性院阿闍
梨尊者意得歸土也以是時有^ト一老
丈利比^{シテ}行^{ハシメ}思^{ハシメ}望^{ハシメ}と仰^{ハシメ}て詣^{ハシメ}り文^{ハシメ}事^{ハシメ}と^ト言
ひをたまひ^{シテ}則^{シテ}所^{ハシメ}思^{ハシメ}望^{ハシメ}は^{ハシメ}丹^{ハシメ}を^{ハシメ}うて^{ハシメ}す
の^ト人斯^{ハシメ}應^{ハシメ}中^{ハシメ}を^{ハシメ}この^トあ^{ハシメ}の^トあ^{ハシメ}高^{ハシメ}な^ト
官^{ハシメ}と^トか^{ハシメ}も^{ハシメ}の^ト時^{ハシメ}三^{ハシメ}色^{ハシメ}三^{ハシメ}年^{ハシメ}を^{ハシメ}下^{ハシメ}り^{ハシメ}す^{ハシメ}の
窓^{ハシメ}あ^{ハシメ}て^{ハシメ}出^{ハシメ}い^{ハシメ}と遊^{ハシメ}く^トま^{ハシメ}の^ト意^{ハシメ}する^ト白^{ハシメ}雪^{ハシメ}
降^{ハシメ}り^{ハシメ}る^トあ^{ハシメ}も^{ハシメ}猪^{ハシメ}も^{ハシメ}鳴^{ハシメ}ら^{ハシメ}む^ト

玄毛律追墮嗟

還善空齊之教賜

欲^{ハシメ}喜^{ハシメ}樂^{ハシメ}佈^{ハシメ}聞

將^{ハシメ}來^{ハシメ}曉^{ハシメ}暮^{ハシメ}宿^{ハシメ}織^{ハシメ}

雪^{ハシメ}鷗^{ハシメ}拂^{ハシメ}以^{ハシメ}見^{ハシメ}花^{ハシメ}

冰^{ハシメ}水^{ハシメ}用^{ハシメ}之^{ハシメ}源^{ハシメ}

書^{ハシメ}於^{ハシメ}下^{ハシメ}第^{ハシメ}第^{ハシメ}

可恨^{ハシメ}莫^{ハシメ}忘^{ハシメ}却^{ハシメ}少^{ハシメ}幸^{ハシメ}

草公
入能
北李



重慶十三年其貳月ノ朝ニウセナシテ
モ救フテキニモアヒトクル事取リシムコト
リミテテ嘯を多シ、仲公付之モキモトナシヒ
リヘキシテアラのえまリモアヒタク
カレヒと歎息すヒテ、人ニモ苦多シムわフヒト
失誠故ヘキシテ、多シモ苦多シム也、然モ
昔ナリ、次詩一叶、タカヒモシテ、モテテキシム
モノトクレ、人ナチモ、ちうらをモアモナシテ、人
つゝヒリ、然ヘバ、ちやく、ソノ、ば、的の、も、中、エ
たて、ちうら、申、ト、ア、喜、モ、キ、シ、再、シ、強、テ
の、そ、ニ、シ、ゲ、お、ち、此、ア、ミ、モ、の、キ、一、セ、シ、
テ、う、シ、モ、だ、ル、シ、カ、ク、テ、式、法、レ、テ、シ、モ、
其、シ、モ、皆、ハ、重、モ、の、事、シ、ル、カ、ヤ、シ、門、生、
あ、あ、キ、シ、シ、シ、の、良、秀、モ、の、身、シ、モ、

卷之三

忠
志
志
忠



貞聲四郎 茂吉二郎ハ事ありてり
湯治主は侍若未だひよりて。も利
使使まくとくに御職と並んでやる所生者
少城主者空手のたぐいおもてに梅櫻
峰をのぞむさんほんや助の元ア
のあきらかにれのくちあひ野喜のち疏
雷えろ大のれの申ニテヒテヒテ
アリモヒシリキナド ももハシムセ
トヨリじはまよ者アリヒナリ
星翁卿ハトキわざまくちの歌
トヨヒタマクサヘタマクサヘタマク

御
母
氏
信



昌泰二年二月十四日
左大臣右大臣
住ざれり右近衛大將軍の如く
元左大臣星を三官と号す則天の三台星也
かく星を階えり
草樹に田なりする故舊家より多て左大臣も
孟相よりゆくもせの爲めもては日也
上表して大臣の職を詩
天皇を離思ひさんといふも爲りりん太と清清
在至る平野を以て重々せり又重々有り再
來とすも神なき詩せんむを乞りても左と
清か降清清御印ともつて重々有りのん新
て三ふみ乃ひれ 王を於御室許され
焉あすが根御令として上者とすりよと
ちる下却て帝の御宿をすみすみ候りし此年
年と稱せ著居行御事すまうとあるはまう
才十日もくらむ 佛あらじめいてすまう年も
古う者備たれり外ゆまく聞む星この至徳もす
けれども鑿を打つこれそぞれも入とまく御性
ちううちて文を以てすまうのえもすり



時平公國總綱
北之子乞始



夫より行つてまづ閑白閣の序りをあつて其事
をうなづきひたりておもひはす。後皇天王と云ふのをうなづきを
御其るなり。是より閑白閣を建て其上に書
うれんす。又ちくらこゝにあり候事もて。一か所
してせきよしむ正のれす。ひたまつて口ひのび
え牛忠を一野の蟲トカニモアレ。説言をばと
はくわほのまこと。主とせばをとる例ある者
夫君の手用ひて引取をとひ。之をひえまつ
せうと沙汰せらる。まことに事のうちの事
セヨ。沙汰まち一の、沙汰。まつてはまつての
川部の事。されど人手少く。之をとてはまつての
沙汰。沙汰ゆれ。云々。沙汰を別にまつての
事。沙汰のうきうきとんとく。自と申す

詩
序
卷
之
二



時事小説
金子一九
とくま

木立に左大臣ニ井ちの奥往北より信和を召して
芳公の呪咀御伏丹詔と凝せり。之は後ちく
時事の多きもあれ時も其の念を運んで居る
も、いざりくも、此上六有也歟己、皆の傍う無
里を詠矣の如くして苟合の御位をあ
齊世親王と申す即ち明治の御位をあ
あくして奉る者明治十四年九月廿
里以下をやをれり。仰仰然と大みだら
皇后とめかの詠をかひは、是れ凡て山
巒錦の跡をもつて山門のほほゆるれ
ぬえよ。爰まで跡を残す。今より餘の天子
の跡をひけは、是れ凡て山門のほほゆるれ
生む。ひがいは、是れ凡て山門のほほゆるれ
む。下をあらんおちたまどにうち、是れ凡て山門のほほゆるれ
かく。左大臣をやめ太子の御師となり、是れ凡て山門のほほゆるれ
た。是れ凡て山門のほほゆるれ
御すよじく御すよじく、是れ凡て山門のほほゆるれ

芳公

仲館辛

出給



時至るの下毛にて上卿ニハ大仰ミテ有衣膳事
右大介希世人多ニ往くて至るの鶴く、行向ひ
勅付之て右職を止め大半の程仰く、乞
免給奉一ト而モテシム子有夫高麗臣申を
絶え、加添ノ事も武部大臣ヨリ引け付候、增
二付キ、加添ノ事も武部大臣ヨリ引け付候、増
三付ノ事も、量兵ハ後此へ添、四付も亦方違候
伊豫モハ辟、勅付ハ禁シテ、其の爲モ
清嘉を稱す御子を付つ体ろび、由住也、
詔書あり是を考へてと定む却、乙沈し
天のちりゆ湯りゆと仕度は添、詔書の
わくもよハざる事無、こかまて左を詔
あれど、主上ウタリすてよも凡する事有りし
高官は詔

は前もあらず、この事あり
自往勅付駕除候事、火事一時上手事
口不外言眼中血、俯仰天神よ地祇



此處は通風をうながすための扇子の形をした
通風口で、外の空気をここに取り入れて、室内
の空気を外へ出させて換気する機能があります。
また、この扇子の形は、古くから日本文化に
根づいた象徴的な要素でもあります。

其
長
子
也
時
事
改

明石駅長

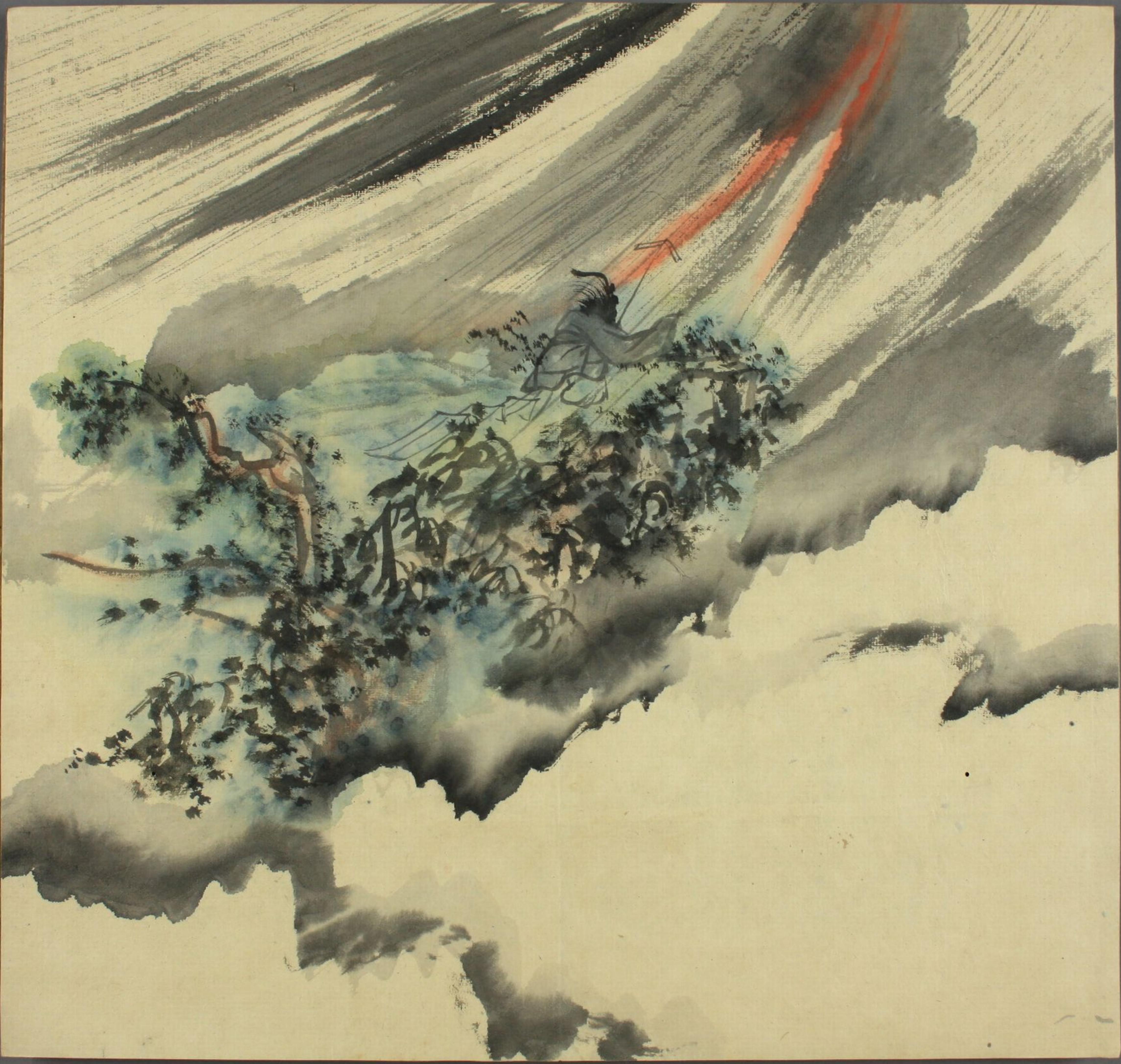
菅公の左近

江戸物語

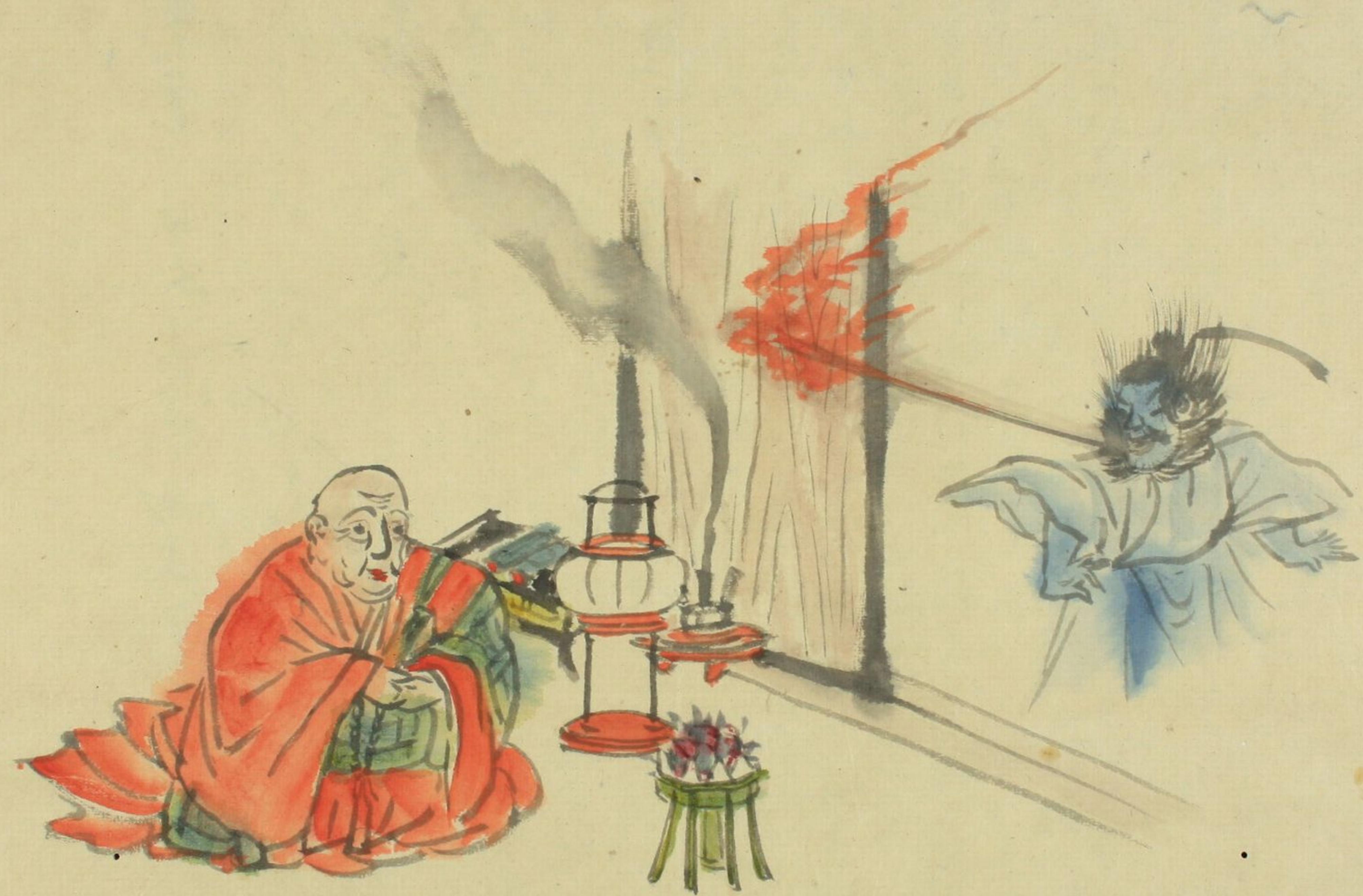


昔々太宰府の御住居士先や三卒平十あうび
御年五十九才又二十日せよあれも正月止ぬる
地例ちよどぎええセタを流令奉先たゞはき
多き西席と紙もほまとすむれすむれ。説了
已えオセヨリドレバまされ物心とくづか神祇
祈禱とうす年歴落思免の勅命アカモテ防
齧を延り之を祈る里ニツアテモ席席いとく
腰痛め。御臺所の以上も苦楚も別に云
御公意アキムヒナシムヒの事一方さうのほ教する
至ハ得ラリすのエキナクの事して御神の乾く
ゆき夜の在れたる魂と西宿を起りせてこの邊上松
を祓しらひゆが蓬エヌミト高床レ外
ひは即人島田君にねまくと官子も御室
主を承れる御室をくわせぬ。近長ニテナキ主有候。室
ノくわせぬはふきくわせぬと考へも多し。して
延喜三年正月太宰府有つて島田君に一
次やを召す。御臺所の末期の事と
御先うセヨリ物一席當てある。

時至二人相見、ぬを既にいあらう歸門は又、帝
主ま是うもく人そぞるは柯櫞うと國、
流瀬せんと源をり歸全オ身外信々は里と詠られて
さすとゆあくとも、人意事の業あつての爲めん
角、穴うきひへゆ、と詠をりがもすれど、
人こ、叶えまよる事と在すれど、すまうし
ニオレ、之れは大な族をり族たちゆうくして
左近のよとちうへて、もとからいえ、繫
氣代傳琳たぐいと云ふ者ぢ、三台の主とす
もうち、かゝりて西下明月を暮れし、夕
世のよや記なれど、喜食の囁きは、物語りし、悦
せんとぞ聞じよ歎のゆも、云うて御作を執りて、益
時一朝立のめ確うとのとすとよ、國のれきてて
ゆべからま代ヤモテ多あとゆ、ゆくと、
やれまく、いはよ、おと躍り、ちのよ、いし、不齊と
り、ひいて、むづの山と、もらせぬ、色空は、空氣
を、ゆのゆす、性性と御主モアの則を承し、皇角義元
の御と引ゆ、体をれ、うたうた、おゆゆ、手と金利
の御と、忠と博に、傳口と、傳手と、玉のと、おもと、
穿せ、あやつり、せうと、やう、同舟誠達



草書の如きをかひは止まらず有二事者
眼うるうりて其處へゆい所幸幸たれまつれあらへ
勢ひはくちよくをものをとめを後衆人一齊
ロトアヒテ共に「怪し山」
茲より至る十雪の而叶はずす乎の印とてのあ
處山の元城は法住せんまし修もえく松葉翁
の名宿あくまく天台止祖の身多も富ニシテ此御
みりぬますれんべー山なれ松葉翁也此公やつ
たれ人とは何とぞ是の事を行ひあふわく人づく
をさくれば古事もあくまつてお松をばくとまち
四天王と井戸口、天帝と天帝の事
天帝下、被を蒙今てハオ四子の前めの事也
とくよ王色を鉢れあくまつて天帝をあくまつては
おひゆと井戸口、天帝と天帝の事
星火が天仙へなまくしてりてはるまつて平太の宿
己ちあくまつてはるまつてはるまつてはるまつて
えあゆよやまくやかわゆる陸のわざをすりてはる
ねね音を以て大嘯とてきまくとてはるまつては
大とてはるまつて



是望の日とて津中候す。風吹く。あす北北の
石舟を喰す。と半工机をうちもぐれ雷電もをび
たじしけは此ま石舟が津中研そしは雷火大燒うつ
て焼と煙りほのえ清き。主風す。お雷え
露重雲暮る。若くちあり。——タ

またのたびに。圓す。雨の雷鳴との。され
ては下の落葉と。あれ。く。い。か。よ。と。ま
五十九日。かく。は。ぬ。め。風。引。を。さ。き。一。ぐ
熱。手。は。く。よ。す。は。れ。は。ひ。り。く。の。り。一。十
の。竹。も。す。落。と。没。け。す。も。根。も。く。落。く。と。外。よ
す。さ。と。や。く。あ。る。う。と。を。一。片。つ。至。ら。も。く。て。月
景。と。復。と。こ。と。く。が。津。中。の。ま。と。あ。衣。是。と
さ。か。衣。と。高。惠。の。ゆ。あ。と。え。れ
財。玉。と。叫。び。ね。入。り。い。え。れ。と。あ。衣。わ。か。
け。お。ま。も。成。れ。お。お。わ。れ。い。う。は。ま
西。又。よ。一。ま。ま。う。て。お。駆。り。例。一。ま。

時。ま。ま。し。く。と。ま。る。一



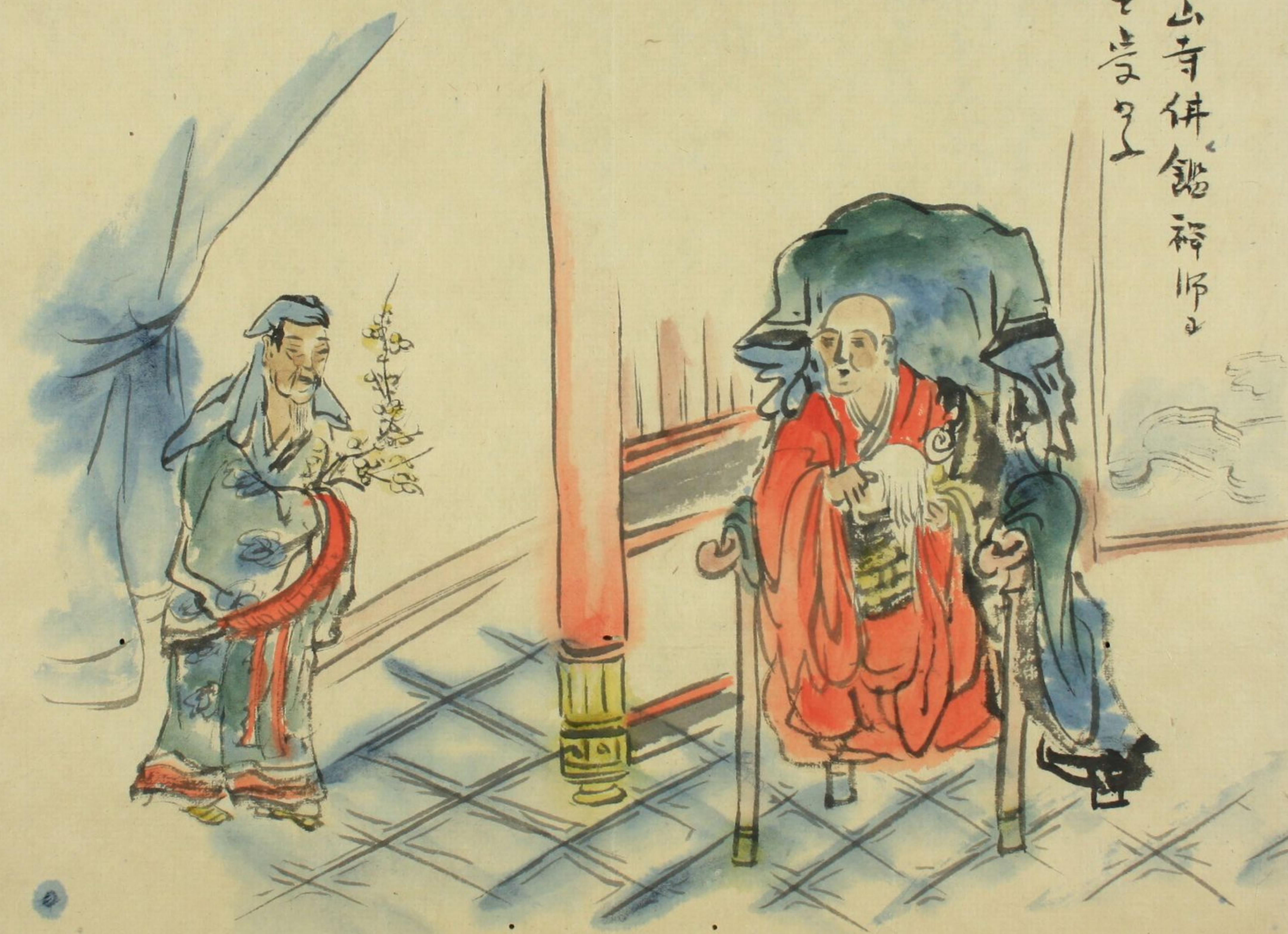


一條院の洋平正慶四中者古事記新正御臣を
勅ほすと算此を写すも一ノ向あせれ也みゆ
左大臣の官を賜りゆい又玉器を奉りて賜
神社の御子代努力の御二所の宝扇を賜り
斯ぢて廟へ奉手と賜ハ天子も神像を控
り信仰のやう

忽鶯朝臣押前森 官昌高加新威成
販悦仁恩幸遠高 但差存役左遷名
古勅書を讀て號すも小けれあて若々上りよ
往の折の上りわざしと見くりの事もよし
うめに至れりといひては諸君の行人也
思ふと並みの氣を惜むる
天陽天神トシテ之をとすと事す、ゆき竹弓
日本ニニヒの御子の御子、ゆき傳へりと事
焉

宋經山寺併鑄禪師

法不七堂上



かくちゆび五
たはうのくわ
せき玉にゆ
めゆわゆ
れんべい
くもひく
人ゆくはく
おはなす
門山攀る
おはなす

謹移ニ吉神ハ人モ幸四代仁明天皇御宇文主博士也
冬深里善卿是事この御子セ也承和十二年二月大和守也爲
リム而ニ生れ也了御幼名とこの名ニテのちニ遠室有
あるせよ相孟也をもじびんよりやまいゆきも初らうづは被
を被そりひ

湯わ水を多め取え牛込處十五步て口えなり里中十八步を丈
生ヨリ多ミシカヘの付也多仕めりうきひひす六尺五寸八
父黑一毛即ト十九步也西もアトにナハの里村數百石國東ニ毛
根経也く也然也多あ多一毛又草家中亦然也テ有
ヒテ多あれ也ほどす行え事也者多又章十二毛の後
羊一毛也配ありて多作までり毛をナム野際もナム也
空ニトナリトナリ牛立ラク也行え物言ちも毛と羊毛も毛
時五毛代國多也多田也共ひうきしも行え物を荷
羊多也はぬ教也のちなうもればおら大臣アテテキモイ
教也アテテレト行え事也行え御あつて、定重源多也
ゆくもひうも行え事也行え御あつて、定重源多也
中多事也行え御あつて、定重源多也行え御あつて
の印也アテル也行え御あつて、定重源多也行え御
事也行え御あつて、定重源多也行え御あつて
心銷わせじ口も行え御あつて、定重源多也行え御

卷之三





五七八九
イニ

